
ニ ュ ー ス

機械翻訳セミナー（日米科学協力委員会）
東京で開かる

1964年4月20日から日米科学協力委員会第2部会（科学技術情報資料交換部会）の主催による機械翻訳セミナーが都道府県会館（東京）で開かれた。日本側議長丹羽保次郎、米国側議長 Franz L. ALT をはじめ日本側 26 人、米国側 11 人の参加者があった。

論文発表が 3 日半、将来の協力計画の討論が 1 日、その他見学などがあった。発表者は日本側 13 人、米国側 8 人で、両国における機械翻訳研究の現状調査の報告と、個別的な研究の報告とがあった。米国側の報告がメタ言語理論の観点からなされたものが多かったのに対し、日本側の報告は自然言語（とくに日本語）をとりあげたものが多かった。その他問題向言語、文字読取機、特殊計算機などについても触れられた。

おわりに 8 項目の勧告が採択された。これにもとづき、当学会またはその機械翻訳研究会が第 2 部会とのあいだでなんらかの了解到達するものと期待されている。勧告には高速度計算機の容易な利用、機械翻訳関係の日本語論文に英文の要約をつけること、カードやテープの形の両国語文章資料の交換、プログラムの交換などがあげられている。

日本側発表論文の予稿集は希望者に配布される（取扱者・西村・電試）。米国側発表論文および資料はおもな研究機関に配布保管されているはずである。

春季連合計算機会議

今年の春季連合計算機会議（Spring Joint Computer Conference）は Washington, D.C. の Sheraton-Park Hotel で 4 月 21～23 日の 3 日間にわたって開かれた。発表された paper から見受けられる一つの傾向は、この会議がますます software oriented になってきたということであろう。ここ 1 年ぐらい金物的な進展は示された可能性を商業ベースのものとして実現してきたということに止っており、最近発表された IBM/360 さえ、その例に洩れない。

他の一つの傾向は昨年の、FJCC にも見られた tutorial session に一層力が注がれたことであろう。

主要な paper としては Syntax-directed compiler に関するもの、Multi-Programming に関するもの

などがある。

展示会は例によって盛大なもので、計算機としてまとまったものとしては Honeywell 200, CDC 3400, Univac 1050, GE 225, SDS 930, LGP-21（卓上形）などがあった。入出力としてはあまり見るべきものはない。IBM 社は 360 の基本回路、メモリープレーン、容量形の固定記憶装置などを展示していた。

東大設置大形計算機きまる

全国国立大学の共同利用に供するための大形計算機が来年度より東京大学に設置されることとなり、機種の設定がいそがれていたが、このたび、日立製作所、HITAC 5020 システムに内定した。

当初設置されるシステムは、65 K 語の記憶容量を持つ HITAC 5020 主計算機と、8 K 語の記憶容量を持つ HITAC 5020 衛星計算機とを磁気ドラムを通して結合した主システムと、32 K 語の記憶容量を持つ HITAC 5020 計算機を中心とした副システムとからなる。両システムは磁気テープ装置を通して結合することができる。

主システムはモニタ制御下で使用され、数値計算を主体として一般用途に用いられる予定である。主機と衛星機との間を磁気ドラムで結合したシステムとすることによって、turn around time が短くなるのが期待されている。

副システムは、シミュレーションなどの特殊用途への利用のほか、デバッグなどの目的にも使用して主システムの効率のよい運転に役立たせる方針である。

なお昭和 41 年度には、主計算機を HITAC 5020 E におきかえることが予定されている。

J.P. Eckert 博士来日

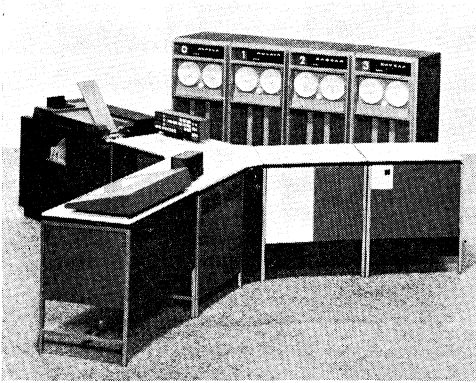
去る 5 月 5 日情報処理学会の招きで、世界最初の電子計算機 ENIAC を Mauchley 博士と共に発明した J.P. Eckert 博士が夫人同伴で来日し、情報処理学会（東京、大阪）、学術会議その他で講演会、討論会を行った。

同博士は現在、スペリーランド、ユニバックディビジョンの副社長であるが、これまで ENIAC のほか、BINAC, UNIVAC-I などの設計を手がけてきており、

電子計算機の生みの親と呼ばれるにふさわしい経歴の持ち主である。講演会その他を通じ、今後の超高速回路の見通し、計算機の時分割による共同利用、分散制御方式による計算機など、示唆に富む見解を披瀝し、5月下旬帰国した。

日本電気 NEAC-2200 を発表

日本電気株式会社は 39 年 5 月、小・中形電子計算機 NEAC-2200 を発表した。



NEAC-2200 電子計算機システム

NEAC-2200 は可変長データが扱える 2 アドレス方式の計算機で、最新の技術を豊富に取り入れ、従来の小・中形計算機にみられない大きな価格対処理能力比を持っている。主な特徴は、

(1) 最近の電子計算機の一つの傾向である Throughput (総合力) を向上させるという設計思想が徹底しており、小・中形計算機としては画期的なアクセス時間 250 ns の制御記憶、サイクルタイム 2 μs の記憶を採用し、また主記憶のコアを時分割で使用することによって、高価なバッファ装置を用いずに、最四つの入出力動作が内部演算と同時にこなせる。これによって、たとえば 2 アドレス、5 桁の加減算を 44 μs、1 万件のテープ分類を 2 分程度で実行できるとい

う大形なみの性能を得ている。

(2) 「Liberator の概念」で設計され IBM-1400 シリーズのプログラムをそのまま NEAC-2200 にかけることができるので、ユーザは容易に NEAC-2200 の新技術を活用することができ、もとの数倍の速度で同じプログラムを処理できる。

(3) 完全なビルディング・ブロック方式の採用と、多種類の周辺装置が完備していることによりユーザの要求に最も適したシステムが構成でき、しかも将来への拡張性に富んでいる。

(4) 日本電気の大型計算機 NEAC-2800/3800 のオンライン衛星計算機として使用できるほか、他社の大型計算機の衛星計算機としても適している。また割込機能が完備しているのでリアルタイムのデータ処理にも最適であるなど、広い融通性がある。

(5) アセンブラ、コンパイラをはじめとして完璧なソフトウェアシステムが用意されている。

(6) 廉価な低速入出力装置、カナ文字も使用できる高速製表印字装置、国内単位を扱える紙テープ装置、国内の通信規格に適合する通信制御装置、ならびにこれらを取り扱うソフトウェアが用意されているなど、国内事情が十分に考慮されている。

NEAC-2200 の主な規格

中央処理装置	演算方式: 2 アドレス, 可変長 2 進および 10 進, 固定小数点 内部記憶: 1 字 6 ビット 2,048 字 ~ 32,758 字
磁気テープ装置	1/2" 幅: 20 KC, 29 KC, 44 KC, 67 KC, 83 KC 3/4" 幅: 32 KC, 64 KC, 89 KC.
高速製表印字装置	400 行/分, 900 行/分, 950 行/分
カード読取装置	200 枚/分, 800 枚/分
カード穿孔装置	100 枚/分, 250 枚/分
磁気ドラム装置 磁気ディスク装置 その他	256,000 字/台, 2,621,440 字/台 25,165,824 字/台, 50,331,648 字/台 紙テープ入出力装置, 通信制御部, オプティカル・スキャナ, オーツ・スキャナ, MICR など